

新 刊 紹 介

死と向いあう看護 (大段 智亮・他著)

最近ほど、医療の中ばかりでなく、外からも死の問題について語られている時代はない。心臓移植をめぐる脳死の問題、ガンを患者に宣告すべきか否か等々である。

筋ジストロフィーの問題を考える時にもこれをさけて通ることはできない。この本は異った立場ではあるが、筋ジスと向いあって、各々が真摯な努力を払ってきた3氏の実践のレポートである。

まず石川氏は患児の父親として、東京地区の筋萎縮症協会の理事長として筋ジスに取り組んでいる。氏がわが児の運命を知り、親の立場からの苦闘、それを一歩乗り越え、協会の仕事に立ち上った氏の情熱が語られている。土橋氏は偶然の機会から筋ジスのボランティア活動に加わり、大学卒業後も筋ジスに向いあっている20代の青年である。彼の文章の1部を引用させてもらうことにする。“患者にとっては、もはや死以外残されたものはない。回復のための手段は何1つない。(中略)回復のための技術とはまったく次元の違った「看護」が、その

とき、全力をあげて集中的におこなわなければならないのではないか。”この文中の看護を、リハビリテーションに置きかえてみるだけで、十分な意味をもつのではないだろうか。大段氏は人間看護学教室を主宰している心理学者である。氏はその教え子達のカウンセリングの場として筋ジスの病棟を選び、その実践記録を報告している。若い女性達と筋ジスの子供達の交流を通じて氏は多くの事を教えてくれる。看護と養育の努力を氏は、患者の自己受容に向って助力すると表現している。リハを志す者にとっても大切な心構えではないだろうか。いずれにしても、3氏の仕事を支える各人が持っている心のバックボーンに羨望を禁じ得ない。リハビリがともすると、技術に走りがちな昨今、多くのリハ関係者に読まれてもらいたい本である。

(横浜市大リハビリテーション科 大川 嗣雄)

(川島書店刊/1300円/TEL 03-365-0141)